四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol 79

恩恵の水と脅威の水

徳島県　藍住町長

石川（いしかわ）　智能（ともよし）

藍住町は、徳島県の北東部に位置し、吉野川と旧吉野川が南と北で挟んだような地形で、歴史的にも吉野川の恵みを受けて、豊かな農業経営が成り立ってきたところです。特に吉野川に隣接する地区は品質が優秀で阿波藍として明治年代後半までは大阪を始め、全国の市場で高値で取引されました。中でも前須地区などは 17 世紀後半に徳島藩最大の工事といわれる新川掘り抜きが行われ、今の吉野川が本流になったとき、上流からの肥沃な客土が堆積して、タデ藍の大産地となった所です。今でもスクモを加工した藍師や、諸国に販売した藍商たちが、頑強な石垣の上に屋敷を構えていた見事な藍屋敷が、町内のあちこちに見られ、かつての藍が栄えた土地柄を偲ぶことができます。

しかし、豪壮な藍屋敷の石垣もその裏にはすさまじい洪水の脅威と闘った人々の歴史を物語る姿でもあります。

町の至る所には、吉野川氾濫の犠牲者の冥福を祈るために建てられた地蔵さんが祀られていて、その多くは今でも香火が絶えることはありません。そこには「吉野川が氾濫しませんように。私達の平和な暮らしがいつまでも続きますように・・・」と、祖先たちの願いが絶えることなく、私達の心に生きている姿を現していると思います。

それにしてもわが町は、吉野川の豊かな「水」の恩恵によって、屈指の田園地帯として繁栄を誇ってきましたが、それだけでなく祖先たちは洪水の猛威を克服し、知恵を絞り手間を惜しむことなく、藍こなし歌にも「寝たと思ったら早や起きた」と歌われたように、重労働の農作業が町の繁栄を支えてきたのです。そのすべてが吉野川の流れと深く関わっていたことを知ることができます。私達が子どものころまでの吉野川は、泳ぎを覚えた川であり、魚釣りを楽しみ潮干狩りで時を経つのを忘れた川でした。近年、町の人たちと吉野川の関わりも少なくなってしまいましたが、いまこそ歴史や産業、暮らしや文化について、深く考える必要を痛感しています。

藍こなし歌

藍の種まき　生えたら間引き　植えりゃ水とり土用刈り
藍の本場は　藍園村よ　広いでんだい　藍ばかり
阿波の北方　起き上がり小法師　寝たと思ったらはや起きた
お前どこ行きゃ　わしゃ北方へ　藍をこなしに身を責めに
葉藍寝かせて　水やって醗酵す　藍の寝床で　色を生む
讃岐せこいとて　阿波へは越すな　阿波の北方なおせこい

※藍住町は、藍園村と住吉村が合併した町です。

お地蔵さん

藍屋敷（旧奥村邸）

親水公園（旧吉野川）